美展

京都丸紅

「美展」の変遷史

昭和

激動の昭和の幕開けと共に
産声をあげた「美展」。

染織文化の発展・継承に寄与し、
きものの美を芸術の域にまで高める、
という高邁な精神のもと、歩みを始めました。
先の大戦では、休会を余儀なくされながらも、
戦後の高度成長期で大きく躍進し、
特選呉服の市場の関心を
一身に集めることとなりました。

第60回　秋の美展会場（昭和34年）

美展37回　紋付　制作：梅原勝治郎
（染織美術研究会発行「昭和の歩み 美展」より転載）

美展100回　訪問着
制作：松井青々

美展55回　振袖
制作：田村興一郎

第43回　春の美展会場（昭和26年）

第100回　美展会場

美展119回　訪問着
制作：山科春宣

美展20回　振袖
制作：渥美新一郎

銀座通を歩くモダンガールたち
昭和初期（染織美術研究会発行
「昭和の歩み 美展」より転載）

丸紅商店京都支店
大正13年～昭和13年

第163回　美展会場

美展120回　訪問着
制作：弐代 上野為二

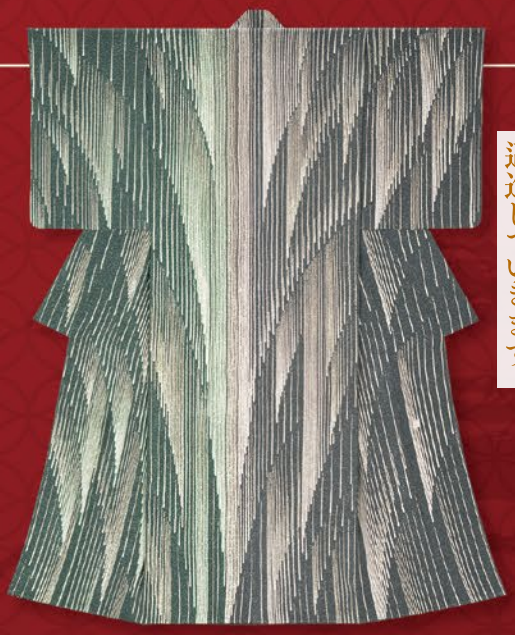
美展160回　訪問着
制作：上野街子

平成

物心ともに充実し、文化と身近に交流する
生き方をもとめる声が、大きな高まりを見せ始めた平成。
文化的価値の高い「美展」は一層注目され、
平成元年に「美展」は１２０回の開催を迎えました。
高品質で個性化、差別化されたきものの創作への熱意は、
ますます強く発展してまいりました。

令和

平成から代わる新しい元号「令和」。
その出典は日本最古の歌集である万葉集でした。
「令和」には「beautiful harmony」＝「美しい調和」という
意味が込められていると発表されました。
きものを着ることで得られる
精神的な豊かさと自分との出会い。
これからの新しい時代に、美しく調和し、
進化し続ける染織文化の創造に
邁進していきます。



美展165回　訪問着
制作：坂井洋

美展162回　訪問着
制作：坂井修

美展121回　振袖
制作：松井佚鳶

美展

染織美の芸術性を追求しつづける「美展」

昭和二年、激動の昭和史とともに産声をあげた染織美術展覧会、略称「美展」。

その誕生から一貫して染織技術の保存継承のみならず、きものの美を芸術の域にまで高めることを目指してまいりました。

その試みのため、当世一流の作家、工房、悉皆たちによるきもの創作グループが結成されました。それが美展の礎となり、その志は脈々と受け継がれ、伝統に培われた文化と職人技とが互いに競い合い、そして融合し、きものを芳醇な芸術として昇華してまいりました。斯界最高峰としての地位を示すがごとく、その高い芸術性に人間国宝の称号を得た上野為二・木村雨山・羽田登喜男をはじめとして、きら星のごとく多くの優れた作家たちを「美展」から輩出しております。

第百六十六回美展のテーマは「揺らぎなき情熱～染織美術の継承～」。

染織美術の継承は、多くのつくり手の情熱に支えられています。

伝統の継承とさらなる発展のときを創り出す「美展」をぜひご高覧ください。

時代衣裳　特別展示

時代衣裳コレクション展
～打掛・振袖の美～
百花繚乱

所蔵：丸紅株式会社

時代の美意識と感性を映し出したきものに出会えます。

▲
黒平絹地花菱亀甲繋模鶴雲取模様打掛
昭和15年
松尾友蔵 作

▲
浅葱繻子地鳥兜笙紅葉模様打掛
明治時代　19世紀

▲
紅平絹地亀帆掛舟模様打掛
明治時代　20世紀

※当該時代衣裳は、販売品ではありません。

黒繻子地丸文散模様縫箔
江戸時代 18世紀前期
所蔵：丸紅株式会社

制作：小林重之

特別企画

美の系譜

～現代の匠が挑む丸紅コレクション～

丸紅コレクションである貴重な時代衣裳をモチーフに、「現代の匠」である染織作家の手により、
着物、帯を新たに創作して一堂にご覧いただきます。
まとうだけで新しい世界を感じられる名品をご堪能ください。

制作：関谷幸英

白綸子地格子花丸模様小袖
江戸時代 18世紀前期
所蔵：丸紅株式会社

掲載画像はイメージです。

京友禅 上野家

豪華で様々な染織技法を駆使した京友禅の中で、
友禅の美しさのみに拘り、
独自の世界を築き上げてきた京友禅の名門「上野家」。

美の極み

花鳥風月を映し出し、
時代に調和する美を伝えてきた美展。
現代の染織界を代表する作家たちの美へのこだわりが
美の極みに花開きます。
出品されるその一部をご紹介いたします。

大文字屋 庄兵衛

京・西陣屈指の老舗の十代目が
創作する逸品帯。
やさしさの中にも品格が漂う
織の芸術が生み出されています。

竹田庄九郎

いま注目の絞り・・・確かな気品と存在感
400年以上の時の流れに磨き抜かれた
精緻な伝統の手技をご堪能ください。

加賀友禅

武家文化の香りを漂わせ、
洗練された美意識を感じさせる加賀友禅。
自然を五彩に昇華させた繊細な魅力を描き出します。

こんや

天然灰汁醗酵建て藍染

日本の自然と風土が育てた
伝統美・天然藍染。
その繊細なジャパンブルーは、
私たちに懐かしさと
安らぎを感じさせてくれます。

織楽淺野
BLANC NOIR

職楽浅野の世界観で、
帯からはじまる着姿を提案します。
日々創造的でありたいと願う
スタイルの表現です。

振袖
Furisode

お嬢様の二十歳の記念日を彩る振袖…
その技と美

V&A

京都丸紅とV&A（ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館）は
日本の伝統的なテキスタイルの技法とV&Aが所蔵するウィリアム・モリスをはじめとする
有数の芸術家による名高いアーツ・アンド・クラフツの図案を融合させた
コラボーレションを発表します。

Pimpernel
by William Morris (1834-96)
England, 1876

第166回

美展

趣意

「揺らぎなき情熱 ～染織美術の継承～」

もうすぐ100年を迎える美展の歴史を支えているのは、この美展にかかわる多くの人の情熱であることはいうまでもない。

ひとつの着物ができあがるためには、多くの人が心血を注いでいる。芸術の域に達するような着物であればもちろんであるが、どんなに普通の着物であっても同様である。

ひとつひとつの作品には、それを生み出した人のさまざまな想いや心持ち、あるいは祈りまでもがこめられている場合がある。それは新しい造形を生み出そうとする情熱といってもよいだろう。そして、制作者をめぐるネットワークのなかにも熱い思いはあふれている。それは、より良き着物をつくろうとする思いであり、同時に、わたしたちの祖先が古代に生み出し、改良し、受け継いできた染織という美の造形を次代に引き継いでいこうという強い情熱である。このふたつの、つまり、制作者とネットワークの双方の揺らぎなき情熱の交錯する場が美展だ。

あえて「揺らぎなき情熱～染織美術の継承～」というテーマを掲げる理由は、これまでの100年を胸に刻み、来る100年やさらにその先に思いを馳せてみるためだ。染織という美の世界が、つねに新しいものを内包しながら革新のみちを歩んできたことを確認するためでもある。古代の衣裳には色がなかった、文様もなかった。しかし、いま、わたしたちの身の回りの着物には、さまざまな色があり多様な文様がある。複雑な技法を駆使することにより、思いがけない意匠が生まれてくることもある。それが、過去から継承してきた染織の歴史であり、これからの可能性でもある。わたしたち美展が歩んできた100年の道のりだけをみても、そこには多くの創造があった。

いま、わたしたちは、多くのつくり手の情熱を受けとめる。伝統的な技法、素材、意匠をどのように現代に結びつけるのか、そして、それをどのように次代に伝えるのか。伝統の継承とさらなる発展のために注がれる熱い思いを受けとめる。

主催

京都丸紅株式会社
Kyoto Marubeni Co.,Ltd.

染織美術研究会